

■ 刑事ドラマと「おっさんずラブ」

テレビ朝日制作の春の新ドラマが快調なスタートを切った。V6・井ノ原快彦主演の「特捜9」。内藤剛志主演の「警視庁・捜査一課長」。そして波瑠主演の「未解決の女 警視庁文書捜査官」。3作品すべてが刑事ドラマである。いささか多すぎる気もする。ただ、テレビドラマを長年見てきた中高年層の嗜好にうまく合致し、功を奏していることも事実だ。



影山貴彦の

テレビ燦々
さんさん

狙いの視聴者層にヒット

ら、スマホ片手にツイッターなどのSNSをしていることがよくある。SNSにドラマの感想や内容を書き込んで、視聴者同士の連帯感を深めているのだ。「SNSのついでに番組を見る」、いわば主従の逆転した視聴スタイルも珍しくなくなった。また、見逃し動画配信サイトなどを利用し、自らのライフスタイルで番組を見る若者がかなり増えた。

そんな若者たちに訴求するドラマ作りも同局はしている。土曜ナイトドラマ「おっさんずラブ」などが一例だ。2016年の年末に単発ドラマが放送され、大いに話題になったことを受け、深夜の連続ドラマとして今春始まった。女性に全くモテない33歳の独身男に突然モテ期が訪れる。ただ、彼に熱い思いを寄せるのはいずれも男性。55歳になる会社の部長と後輩の社員だ。主演は田中圭、「ヒロイン」となる部長役は吉田鋼太郎、後輩社員役は林遣都だ。芸達者の3人が美に素晴らしい。徳尾浩司の脚本もいい。コメディイながら、彼らの純愛ぶりに、時に感動さえ覚える。SNSも、しっかり盛り上げられているようだ。

かじやま・たかひこ 同志社女子大学メディア創造学科教授。1962年生まれ。元MBSプロデューサー。ABCラジオ番組審議会委員長。「カンテレ通信」コメンテーター。

※次回は5月6日に掲載します

2018年4月30日 毎日本新聞

21面

※ 影山貴彦教授

(学芸学部 メディア創造学科)

■ 永野芽郁に夢中「半分、青い。」

NHK連続テレビ小説「半分、青い。」が、4月のスタートから2カ月目に入った。前作の「わろてんか」は、正直乗り切れないまま終わった。魅力的な部分も時にあったが、心に深く刻まれることは少なかった。それに対し「半分、青い。」は、早くも視聴者をつかんでいる。何よりヒロイン・鈴愛役の永野芽郁の演技がとてつもない。現在18歳の永野は、遠くない将来、女優として大輪の花を咲かせるに違いない。

深みある目に大女優の予感

ドラマは、子供の頃に片耳を失聴したヒロインが、漫画家になる夢を抱きつつも挫折。離婚も経験するなど、さまざま困難を乗り越え、前向きにたくましく生きる姿を描いてゆく。脚本を手掛けるのは、恋愛ドラマの名手として知られる北川悦吏子だ。

漫画家を目指す鈴愛は、愛する故郷・岐阜に別れを告げ、東京で奮闘する姿が今後描かれる。ちなみに北川は岐阜の出身だ。5月は岐阜編と東京編が半々で描かれると勝田夏子チーフプロデューサーは語っていた。

既に印象深いシーンも多いが、4月28日の放送は卓越していた。祖父(中村雅俊)たちが歌う「あの素晴しい愛をもう一度」を聴きながら、さまざまな感情の交錯を表情の変化だけで見事に演じていた永野。ディレクターは彼女のアップを多く撮りたくなるに違いない。あどけなさを残しながら、時折驚くほどの深みのある目をするところもある。

鈴愛と同じ日に生まれて以来、ずっと愛おしく彼女を見守り続ける律(佐藤健)とのやり取りに、自らの青春時代を投影している視聴者も多いことだろう。

影山貴彦の
テレビ燦々
さんさん



かげやま・たかひこ 同志社女子大学メディア創造学科教授。1962年生まれ。元MBSプロデューサー。ABCラジオ番組編集委員会委員長。「カンテレ通信」コメンテーター。

2018年5月6日 月
毎日新聞

15面

※ 影山 貴彦 教授
(学芸学部 メディア創造学科)

つらいことあるけど笑い飛ばせる

本田らの強さ



我が道行くタイプ

「おやじ」でも「おじさん」でもなく、関西弁で言う愛嬌(あいきょう)を含んだ「おっさん」の力。今回活躍した本田たちは、いづれも関西など西日本出身者。まさに、若手にうとま

れず、無理はせず、わが道を行く、愛すべき「おっさん力」を発揮した形だ。

影山氏によると、社会に一定の経験を積んだ落ち着きがあり、一世代前の団塊の世代に求められていたような悲壮感はなく、良い意味

で楽観的な強さがあるという。「おっさんは『巨人の星』的な血へと吐くまでの努力も、バブルのイケイケも崩壊も知っているから、努力はするが、悲壮感にはつぶされずに前を向ける余裕がある」のだという。

おっさんは、一世代前の先輩に「背中を見て盗め」と言われて苦労した経験もあり、若手に対し「君らの言うこと100%分からもしれへんけど、聞く耳はもってるぞ」という立場で、コミュニケーションも良好だ。一般社会でのおっさんの定義はおよそ40〜50

代だが、サッカー界では30代はベテラン、「おっさん」世代と言える。

98年フランス大会で初出場した日本代表。サポーターの期待の中で、当初は「絶対には負けられない」という緊張感の頂点で「ガチガチ」だった。20年後のロシア大会の、次世代の日本代表の本田たちについて、影山氏は、いい意味で社会の中の「おっさん」と似た強さを持っているとみる。「『いいこともあれば、つらいこともあんなんで。知らんけどな』と笑い飛ばせる強さがあるから、前評判でただ

かかれても、ミスで先行されても、悲壮感でガタガタになったりせず、落ち着いて前を向けるのでしよう」。

調子に乗る欠点も

しかし、おっさんにも欠点はある。影山氏は「おっさんの欠点はすぐ調子に乗ること。おっさんだけで頑張りすぎず、おっさんが若手にええとこ取らせるのが大事」とアドバイス。そして「厳しい戦いの最後の最後にはおっさんの経験が生きる。次のポランド戦の勝ち点を信じてます」とエールを送った。【清水優】

「おっさん力」が「ゴール」だ



同志社女子大影山貴彦教授「世のおっさんに力」

サッカーW杯ロシア大会で「おっさんジャパン」などとやゆされていたMF本田圭佑(32)、FW岡崎慎司(32)のセネガル戦での活躍に、DF長友佑都(31)は「『おっさん』たちで作ったゴールだ」とコメントした。30歳のMF乾貴士も含めた「おっさん」たちの活躍に「おっさん力(ちから)」の著書のある同志社女子大学芸術部メディア創造学科の影山貴彦教授は、「『おっさん』たちの活躍は世の中のおっさんたちに力を与えた」と喜んだ。

2018年6月26日 日刊スポーツ 21面

※ 影山 貴彦 教授

(学芸学部 ×メディア創造学科)